

つまべに、錦邊蓮、其花白くして邊紅なり、此蓮紅蓮白蓮の中に植れば、皆つまべになるといへり、今は多くあれども、是唐蓮なるべし、地錦抄に、唐蓮花、白きは大りん、くちべには小ぶりといへり、ある人の池中に、つまべに多く繁茂して、夥しく成りし故、蓮堀に命じてほらせんといひしが、此つま紅は葉の存せしうちはゆるし給へといひて、堀らざりし故、いかにと問ふに、此つま紅の莖の刺は常の蓮より尖り強くして、肌を破るにたへ難し、先年この蓮を堀りて難儀せしといへりとぞ、つまべには處々にあり、秘傳花鏡所載の錦邊蓮にして、白色毎瓣邊上有一線、紅暈或黃暈といへる種にして、錦邊蓮なれども、張木威は絳邊蓮といひて、七言律あり、又或黃暈といへるは未だ見ざれども、菊地容齋曰、京の清水觀音境内に、辨財天の小池中に黃邊の白蓮あり、日に映し見れば、銀の花瓣に金の幅輪を鏤たるごとしといへり、

〔佐渡志^五物産〕蓮稱 和名ハチヌ

天竺蓮 トイフモノハ、花形大ニシテ白色、瓣邊一分バカリ深紅色、コレヲ秘傳花鏡ニ錦邊蓮ト云、又尋常ノ花ヨリ小サクシテ、莖上ニ二三四五花簇リヒラキ、千瓣ニシテ内ニ房ナキモノ、和州當麻寺ヨリ出ヅ、秘傳花鏡ニ、品字蓮ハ一莖三花ヒラク、ソノ二花ヒラクモノヲ、集解ニ合歡並頭ト云、^{○中}金蓮ハ詳ナラズ、苜菜ニモ金蓮ノ名アリ、

〔古今要覽稿[○]草木〕蜀紅蓮[○] 斑蓮[○]

蜀紅蓮を斑蓮といふは、白色に紫色の斑文あり、是も處々にありて斑蓮といひ、蜀紅蓮と呼べり、又故桑名少將^{定信朝臣}の蜀紅蓮と呼べるは、此花戸にいふ種と異なりて、常の紅蓮のごとくにして鮮紅なり、蜀紅と呼て可なり、彼白花紫斑の種は斑蓮といひて可なり、此斑文のある種も一ならず、天竺斑蓮と呼は、殊に紅斑にして、尤美なるは是に及びなし、又不忍白蓮といへるも、潔白にして邊に紫の斑あり、又錦邊蓮、前にいふ一線に紅邊の通りたる種にあらず、邊に紅暈あれども、一